羅 針 盤

私のモットーは、「生涯学習」と「生涯現役」である。そして、政治に携わる者としての理念は、**「子どもとお年寄りは社会の宝・国の宝」**という一点に尽きる。この信念を胸に、私は札幌市議会議員として歩みを重ね、九期目を迎えた。任期を全うすれば３６年に及ぶ。

政治家は夢を描き、夢を語らねばならない。夢を語れなくなったとき、その役割は終わる」。だが、夢は語るだけでは足りない。語った以上、その実現に向けて努力し続ける責任を負う。その覚悟をもって、私はこれまで市政の場に立ち続けてきた。

「青春とは、人生のある期間をいうのではなく、心の様相をいう。」

これは、米国の実業家であり詩人でもあったサミュエル・ウルマンの『青春の詩』の一節である。彼は青春を、次の五つの要素で語っている。

想像力と意思、情熱と勇気、冒険心、理想と信念、そして希望。

「人は年齢を重ねたから老いるのではない。理想や情熱を失ったときに初めて老いる。希望を失わぬかぎり人は老いることはない。」

私はこの言葉を、長年、自らの指針としてきた。

生涯学び続け、生涯現役であるとは、単に働き続けることではない。時代の変化から目を逸らさず、自らを更新し続けるという意思の表明である。私は「馬齢を重ねる」ことを良しとせず、常に問いを持ち、夢を描き、それを言葉にし、現実に近づける努力を重ねてきたつもりである。

私の政治理念は明快だ。子どもは未来を担う国の宝であり、お年寄りは社会を築いてきた尊き宝であり。この二つに世代が安心して暮らせる社会をつくること。その土台のうえで、若者が希望を持ち、現役世代が誇りと生きがいを実感できる社会を築くこと、これこそが政治の使命だと考えている。

政治の要諦は、人間の本質に根差し、共同体の生活を高め、幸福を追及することにある。社会全体の繁栄を図りながら、同時に一人ひとりの人間性を磨く。その両立を目指すところに、政治の本来の姿がある。

令和４（2022）年、札幌市は市制100年を迎えた。

それは通過点であり、新たな100年への出発点でもある。昭和47（1972）年の札幌冬季オリンピックが、都市機能と国際的評価を飛躍的に高め、札幌の発展の大きな転機となったことは改めて記すまでもない。

私は平成31（2019）年に『五洲第一の都　さっぽろ』を刊行し、札幌の歩みと課題、そして未来像を描こうと試みた。当時の戦略の核は、2030年冬季オリンピック・パラリンピック招致を契機とする都市再生であった。しかし、その構想は東京2020夏季大会を巡る不祥事やコロナ禍、さらには北海道新幹線札幌延伸の大幅な遅れなどにより、抜本的な見直しを迫られた。

人口196万人を擁する札幌市は全国第４の都市である。しかし、その都市運営は人口増に伴う交付金、いわゆる「人口ボーナス」に依存してきた側面が否めない。人口減少時代に入った今、もはや従来の延長線上に未来はない。財政力指数が政令市下位にある現実は、私たちに自立した都市経営を強く求めている。

これからの札幌市に必要なのは、自ら稼ぐ力を備えた都市となることである。そして、その力を形にする政治である。本書は、その２つをいかにして磨き、次の100年へとつなぐかを問い直す試みである。

私は生涯学習と生涯現役、そして「子どもとお年寄りは社会の宝・国の宝」という理念を羅針盤として、札幌の新たな100年を構想したい。札幌がこれからも凛然と輝き続ける都市であるために、その進むべき方向を示すこと、それが、長く市政に携わってきた者としての責任であり、本書を著す理由である。

三　上　　洋　右